

白川郷における農村像と住民の生活様式

羽田 司・松井圭介・市川康夫

キーワード：重要伝統的建造物群保存地区、合掌造り、農村景観、居住空間、白川村

I 序論

I-1 研究課題

これまでの文化を現代にまで伝承する様々なものを、後世にまで残すことを試みる多様な活動がある。その代表例として、日本国内ならば文化庁による伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）への選定、世界的にみれば国連教育科学文化機関（UNESCO）による世界遺産への選定が挙げられよう。本稿で対象とする岐阜県白川村荻町地区（白川郷）は、山間部に位置する集落であり、周囲からの隔絶性が高かったことから、1800年代後半から1900年代の初頭にかけて「奇異」な風習が存在する地域だとみなされてきた。それが、第二次世界大戦中には文化的に貴重な生活文化が残る地域であると認識されるようになり（加藤，2011）、1976年には伝建地区、1995年には富山県の五箇山とともに世界文化遺産に選定され、その農村景観は世界的にも貴重な文化遺産であると評価される。

荻町地区において、一際目を引くのが「合掌造り」と呼ばれる傾斜の急な茅葺屋根の家屋（以下、合掌造り家屋）である。この合掌造り家屋が棟を揃えて点在しているのが、荻町地区の特徴的な集落景観とされる（西山ほか，1995b）。黒田ほか（2001）は、それに加え、水路や石垣により細かい領域が形成されているが、高さのある景観要素が少ないために領域の境界が不明瞭であるこ

とも、荻町地区の景観特徴であるとしている。

水ノ江ほか（2007）は、産業面や地理的条件からの歴史的変遷を踏まえ、明治中期における荻町地区の集落景観が極相期であったとした。そうした集落景観は、第二次世界大戦以前までは住民の共同作業によって、比較的、維持・管理されてきた。しかし、戦後になると白川村は過疎化傾向となり、さらに、1955年頃からのダム建設により地域の産業構造が変容したことで、合掌造り家屋は減少し、集落景観を変化させた（高口ほか，2006）。

1970年代になると、合掌造り家屋を有する伝統的な農村景観の崩壊を危惧し、荻町地区では景観の保全活動が開始され、同時に積極的な観光化が図られた。これにより合掌造り家屋の減少は抑制されたが、景観の維持・管理は、住民の共同作業のもとで行われる機会が減り、業者への委託が増加した（黒田ほか，2001）。西山（2001）は、集落の観光化により、観光業を営む店舗の集中や、観光収入による住宅や車庫の新築、農地の宅地化や耕作放棄地化が進行したことを明らかにした。伝建地区では、集落が保全の対象なのにもかかわらず、荻町地区では合掌造り家屋に偏重した維持・管理が行われ、住宅の建て詰まりや耕作放棄地の増加により結局は集落景観を損ねていた。このことから、黒田ほか（2003）は、合掌造り家屋の周囲までを含めた保全が重要であると述べている。また、谷口ほか（2007）は、1970年代の荻町地区の観光化は住民を中心とする内発的な観光地形成

であったが、1995年の世界遺産登録以降の観光化は観光客を急増させ、地域における内発的な観光地形成では限界をきたし、外部からの援助を要すると指摘している。荻町地区における観光客の行動に関しては、羽生ほか（2002）が明らかにしており、集落内に定番の周遊ルートが現出しているとした。

以上のように、これまでの荻町地区を対象とした研究では集落景観の特徴や合掌造り家屋を含む伝統的景観が保全に至るまでの過程、保全活動と観光化がもたらす集落景観への影響が明らかにされている。さらに、近年では、コンテンツ・ツーリズムやインバウンド・ツーリズムといった新たな観光の動向や実態を明らかにした研究もみられる（伊藤，2014；神田，2012；佐藤，2015）。しかし、保全される集落景観を培ってきたのは、そこで生活する住民である。それにもかかわらず、住民の生活を視野に入れた研究は僅少である。そういった点において、才津（2006）は、急速な観光化が、住民の生活と文化財の保全、観光地化の均衡を崩壊させており、世界遺産への登録以後、住民の生活を圧倒する形で、文化財の保全と観光地化が進行している現状を明らかにしており、重要な視座を与えている。とはいえ、現在の住民の生活様式の実態や、その実態が保全される集落景観から想起される農村像とどれほど異なるのかといったことは明らかにされていない。

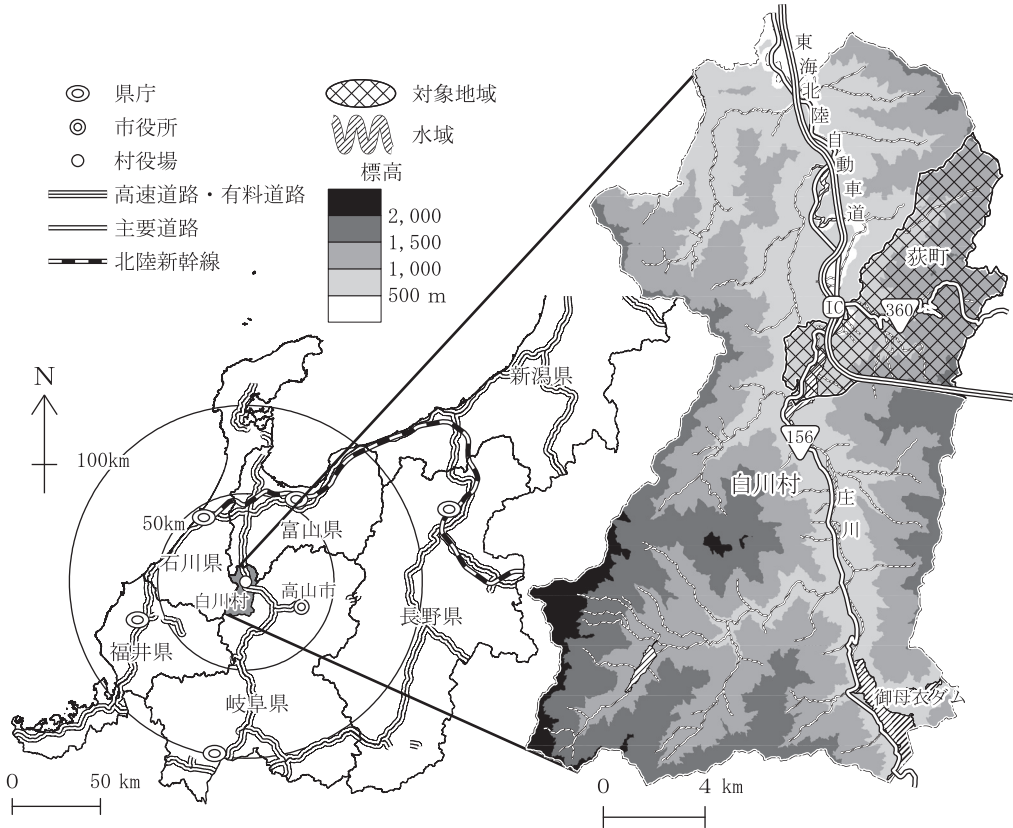
そこで本稿は、岐阜県白川村荻町地区を事例に、対象集落が保全しようとする農村像と合掌造り家屋で生活する住民の生活様式との相違を明らかにする。その際、合掌造り家屋の外観は農村景観の構成要素として重要視される一方で、家屋内部は農村景観に与える影響が小さいため、住民によって変化が生じていることが予想されることから、合掌造り家屋の内部環境に着目する。分析の手順として、Iでは研究の課題と目的を述べ、さらに、対象地域である荻町地区の概要を示す。IIは合掌造り家屋の成立を概説した後に、荻町地区を中心に、白川村での合掌造り家屋の変遷と白川村の地域的发展や産業の変化を記述し、さらに、現在の

土地利用の特徴をみる。IIIにおいては、一般的な住宅として利用される合掌造り家屋と民宿として利用される合掌造り家屋のそれぞれの利用形態の特徴について言及する。IVでは居住する住民の合掌造り家屋に対する評価を検討した上で、これまでの結果を踏まえて荻町地区が保全しようとする農村像と合掌造り家屋で生活する住民の生活様式の相違を考察する。

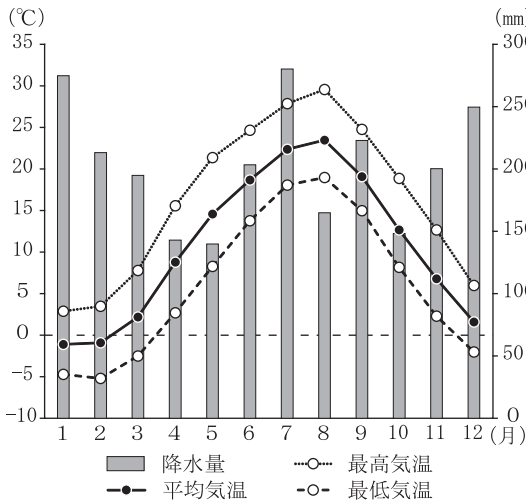
I-2 研究対象地域の概要

白川村は岐阜県の北西部に位置し、日本海から50kmほど内陸の山間部にある（第1図）。白川村の96%は山林が占め、最も標高の低いところでも351m、最も標高の高いところでは2,702mに達する。集落は庄川の谷沿いの標高500m付近に多い。このように岐阜県内にあっても比較的日本海側に位置し山間部にある白川村は、冬の降雪が多く、1mを超える積雪があることから特別豪雪地帯に指定される（第2図）。月別の平均気温をみると、最寒月の平均気温は1月で-1.1℃と氷点下である。最暖月の平均気温は8月で23.5℃と、東京都心部のそれよりも3℃ほど低い。

白川村は岐阜県内の飛騨市と高山市と隣接する。村域の北は富山県、西は石川県に接しており、県境に立地する。2010年における村の人口は1,733人、世帯数は601世帯である（第3図）。白川村役場から岐阜県庁は直線距離にして約100kmある一方で、50km圏内に石川県庁があり、50km圏を少し超えたところには富山県庁がある。また、福井県庁も白川村役場から約65kmに位置しており、岐阜県庁よりも日本海側の県の県庁に近接する。白川村の北部には東海北陸自動車道が通過しており、白川郷インターチェンジがある。東海北陸自動車道を北上すると北陸自動車道と接続し、富山市および金沢市まで約1時間で到達する。また、東海北陸自動車道を南下すると、40分ほどで高山市へ、1時間50分ほどで岐阜市へ行くことができる。2015年3月に北陸新幹線の長野-金沢間が開通したことで、北陸方面を経由することで東京都との交通の利便性が向上した。これにより、今後



第1図 研究対象地域

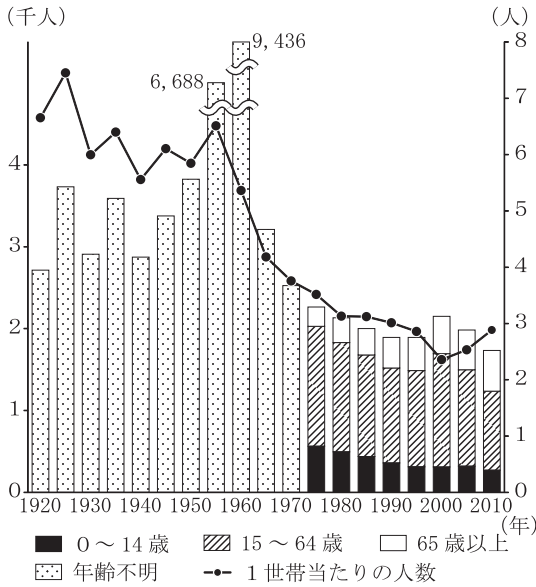


第2図 白川村の月別降水量と気温（1981～2010年の平均値）

（気象庁データにより作成）

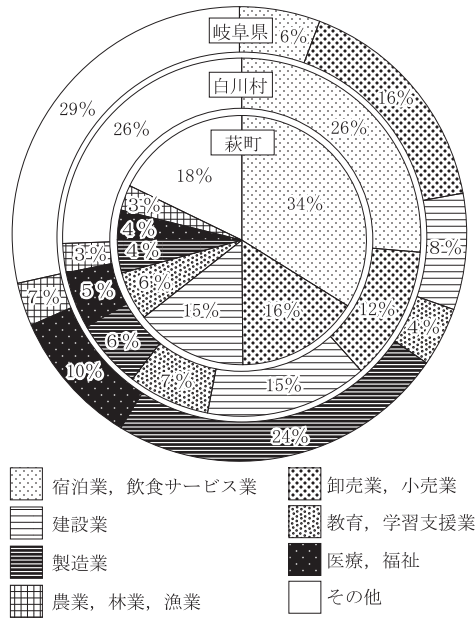
は金沢方面からの白川村への来訪者が増加することが予想される。

白川村内でも、とりわけ合掌造り家屋が集中する地域が荻町地区である。荻町地区は庄川の右岸に発達した集落であり、東海北陸自動車道の白川郷インターチェンジのある鳩谷地区に隣接する。国道156号線と360号線が集落内を通過しており、山間部の集落としては交通の利便性が高い。2010年における荻町地区の人口は615人、世帯数は181世帯となっており、白川村のなかでは、人口および世帯数ともに最大の集落である。産業別の就業先をみると、荻町地区において最多は宿泊業・飲食サービス業の133人で、就業者全体の33.8%が従事する（第4図）。この割合は、白川村全体で宿泊業・飲食サービス業に就業する者の割合の26.3%、岐阜県全体の5.7%と比較しても高い値を



第3図 白川村の人口と1世帯当たりの人数
(1920～2010年)

(国勢調査により作成)



第4図 産業別就業状況(2010年)

(国勢調査により作成)

示す。続いて、萩町地区で多い就業先は卸売業・小売業であり、63人(16.0%)が就業している。宿泊業・飲食サービス業と卸売業・小売業を合わせれば196人に達し、就業人口の約半数がこれらの産業に従事する。一方、農業・林業・漁業に就業する者は、就業者全体の3.3%にあたる13人のみとなっており、一次産業の就業率は低い。

II 白川村の変遷と土地利用

II-1 合掌造り家屋の成立

白川村は山間に位置することから平地が少なく、日本海側の気候にあることで冬季に積雪がある。そのため、そこで生活する人々は、限られた土地のなかで生産の場である農地を確保し、除雪にかかる労働力を削減することを要求されてきた。また、食糧の生産性が低い時代に、家屋の建設に多くの時間を割くことは困難であり、合掌造り家屋は、こうした自然条件や人々の営みの中から成立してきた。白川村史編纂委員会(1998)によれば、白川郷で発達した合掌造り家屋の特徴と

して2つ挙げられる。1つ目は、屋根裏が広く、その屋根裏を何層にも区切って積極的に利用してきたことである(写真1)。2つ目は、屋根がほぼ正三角形と急勾配であり、切妻造りの妻もほぼ正三角形で、その構造の特徴が外観から把握できることである。こうした特徴は、屋根裏を設けることで垂直方向に床面積を広げ、屋根を正三角形に近づけることで雪の重みに強い家屋構造にして



写真1 合掌造り家屋の屋根裏

(2015年9月羽田撮影)

おり、地域の自然条件に適応してきたことが窺える。合掌造り家屋では大家族制の生活が営まれ、これも家屋数を減らすことで、農地の確保や積雪の多い白川郷での除雪作業を軽減する工夫の1つであった。

II-2 合掌造り家屋の変遷と白川村の変化

合掌造り家屋が建設され始めたのは1700年前後からであり、それは1955年頃まで続いた（谷口ほか、2007）。家屋の建設は、1日から数日中で行われ、維持・管理における、高度な作業は専門の業者や職人が担い、それ以外は、結やコウリヤク¹⁾といった住民の共同作業で行っていた（白川村史編纂委員会、1998）。家屋の屋根裏では養蚕業が営まれ、合掌造り家屋は住民の生活の場であるとともに、労働の場であった。

伝統的な方法での合掌造り家屋の維持・管理は、第二次世界大戦以前まで継続していた（高口ほか、2006）。しかし、戦後になると白川村内外で生じる多様な変化のなかで、合掌造り家屋は減少し、周囲の景観とともに保全の対象となっていく（第1表）。

1950年代の白川村は、戦後の引き上げと、電源開発用のダム建設のための従業員の流入により人口が増加した。1950年の人口は3,824人であったが、1955年には6,688人、1960年には9,436人となった（第3図）。一方、合掌造り家屋数は1950年代の間に275棟から223棟に減少した。1952年の椿原ダムの着工、1954年の鳩谷ダムの着工、1958年の御母衣ダムの着工といった立て続けのダム建設が、合掌造り家屋のある既存の集落を消滅させた。また、水没しなかった住宅でも土地補償や家屋売却代金などの収入を資金として非合掌造り家屋への建て替えが進んだ（白川村史編纂委員会、1998）。

1960年代に入ると、ダム建設の竣工により、白川村の人口は激減し、1965年には3,211人と1960年の約3分の1となった。過疎化や大手企業の山林買収や土地投資により合掌造り家屋数も191棟から144棟にまで減少した。こうした、過疎化の

第1表 白川村における主な出来事

年代	合掌造り家屋数(棟)	主な出来事(年)
1950	275 ↓ 223	白萩橋の永久橋化(1950) 大敦橋の永久橋化(1951) 椿原ダム着工と内ヶ戸、下田地区の消滅(1952) 鳩谷発電所ダム着工と野谷、大谷地区の消滅(1954) 御母衣ダム着工と尾神、秋町、福島、牧地区の消滅(1958)
	191 ↓ 144	御母衣ダム竣工(1961) 白川合掌保存組合 発足(1963~1964)
1970	133 ↓ 114	白川郷荻町集落の自然環境を守る会 結成(1971) 荻町地区内に公共駐車場 完成(1974) 国鉄のディスカバー・ジャパン・キャンペーン(1975) 荻町地区の重要伝統的建造物群保存地区 選定(1976) 白川村伝統的建造物群保存地区保存条例 制定(1976) 白山スーパー林道 開通(1977) 白川村荻町伝統的建造物群保存地区保存計画 策定(1977) 城山の展望台の整備(1978)
	112 ↓ 94	荻町から看板を失くす運動 実施(1980) 白川村荻町伝統的建造物群保存地区景観保存基準 策定(1985) 国道156号バイパスの工事 本格化(1987) 世界遺産暫定リスト入り(1992) 白川村荻町伝統的建造物群保存地区保存計画 改訂(1994)
1990	91 ↓ 88	世界文化遺産 登録(1995) 財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団 創設(1997) 白川村荻町伝統的建造物群保存地区景観保存基準 改訂(1999) 景観保存基準におけるガイドライン 策定(1999)
	2000	80
2010		白川村観光基本計画 策定(2010) 白川村観光基本計画 策定(2013) 北陸新幹線長野—金沢間 開通(2015)

注) 2000年代の合掌造り家屋数は2002年の値である。
(佐藤(2015)、白川村史編纂委員会(1998年)、西山ほか(1995a)により作成)

進行や合掌造り家屋数の減少は、住民の不安を深めることとなり、村の活性化や文化財の保護の意識を高めた。1963年には白川合掌保存組合が全村規模で発足し、1年間であるが活動した。

1970年代になると、合掌造り家屋数は133棟から114棟に減少するものの、合掌造り家屋を含む集落景観の保全活動が活発化した。1971年には荻町地区の住民により「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が結成され、荻町地区の集落景観の保全が本格化した。1976年には荻町地区が伝建地区に選定されており、住民の保全活動は成果を挙げた。伝建地区の選定と同時に、白川村伝統的建造物群保存地区保存条例が制定されており、法律による規制が開始された。荻町地区で保全される集落景観は、地域の観光資源としても活用され、観光化も促進された。1974年には荻町地区内に公共

駐車場が整備され、1975年には国鉄のキャンペーンにより観光客が急増した（西山ほか、1995a）。1978年には荻町地区の集落を一望できる城山の展望台が整備されている（写真2）。

1980年代では、合掌造り家屋数が112棟から94棟にまで減少し、100棟を下回った。荻町地区の集落景観を保全する活動や規制は継続しており、1980年には地区から看板を失くす運動が行われた。また、1985年には白川村荻町伝統的建造物群保存地区景観保存基準が策定された。交通の利便性の改善も図られており、1987年には国道156号バイパスの工事が本格化した。

1990年代の人口推移をみると、1990年の人口は1,892人であったのが、1995年には1,893人と横ばいで推移した。合掌造り家屋数は91棟から88棟と微減であった。荻町地区における合掌造り家屋の集落景観は、富山県の五箇山地区における合掌造り家屋の集落景観とともに1992年に世界遺産の暫定リスト入りを果たし、1995年には世界文化遺産に登録された。世界遺産への登録は、保全活動や規制をより盛んにした。1997年には合掌造り家屋を保存するための財団が創設され、1999年には景観を保存するための基準やその基準のガイドラインが策定された。

2000年以降は、2002年に完成する東海北陸自動車道白川郷インターチェンジまでの延伸工事のために、一時的に人口が増加する。2000年の人口は2,151人となったが、それ以降は2005年に1,983人、



写真2 城山展望台よりみた荻町地区
(2015年9月安永撮影)

2010年には1,733人と減少している。合掌造り家屋数は2002年の値で80棟となった。2003年には白川村景観条例が制定され、5年後の2008年には内容が改訂され、保全の状況に合わせて規制内容が再検討されている。2015年には北陸新幹線の長野－金沢間が開通し、関東地方からの交通の利便性が向上した。また、近年では政府によるインバウンド・ツーリズム強化政策により外国人観光客が増加している。

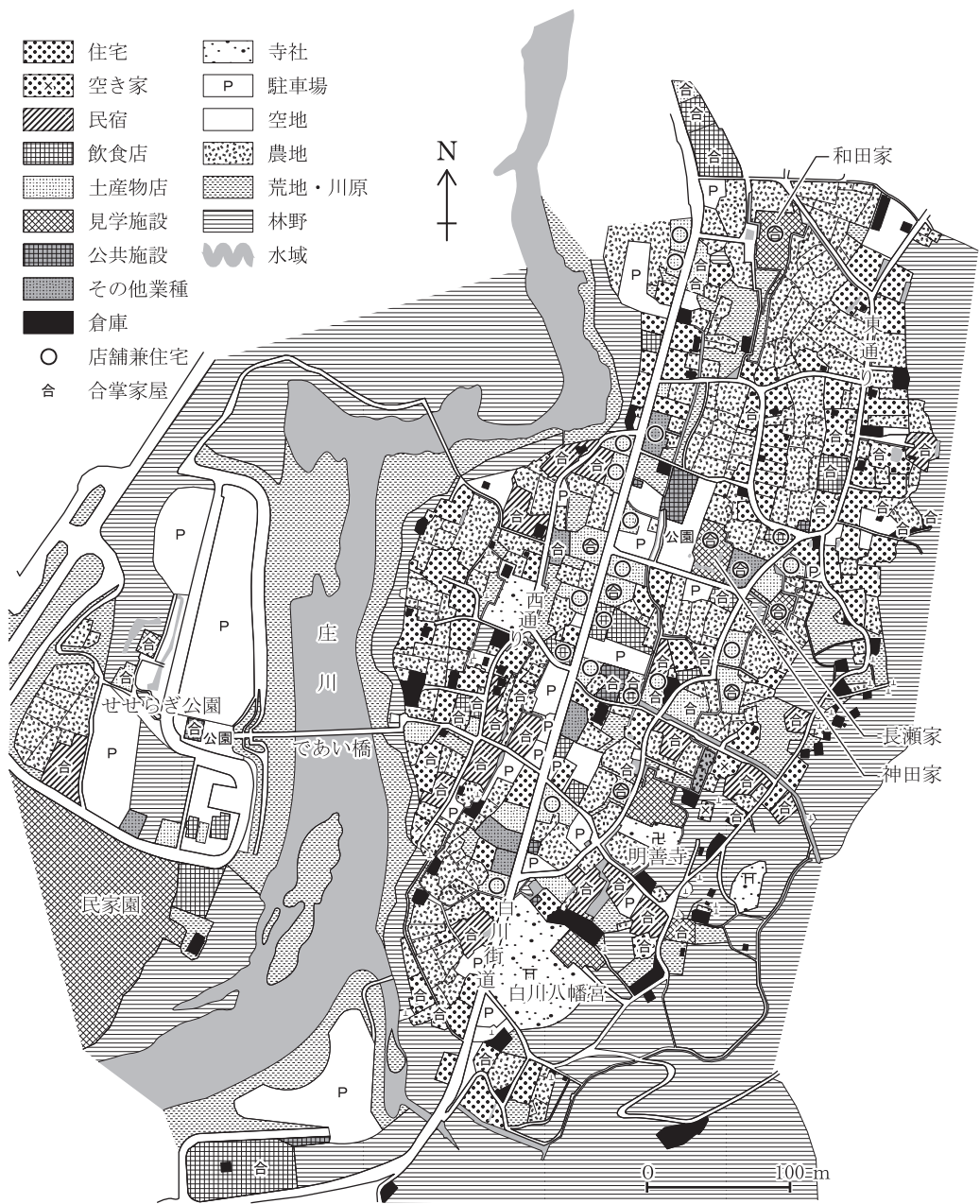
Ⅱ－3 荻町地区の土地利用

2015年9月25日と26日の2日間にかけて荻町地区の土地利用調査を実施した（第5図）。庄川の左岸には大規模な駐車場を有する「せせらぎ公園」があり、土産物店や飲食店、観光総合案内所などが立地する。せせらぎ公園の南には「合掌造り民家園」があり、合掌造り家屋の内部を公開するほか、白川村に因んだ様々な体験を提供している。

荻町地区の中心は庄川の右岸に発達する。白川街道が集落の中央を北北東から南南西にかけて縦断しており、午前9時から午後4時にかけて観光目的の車両の進入が制限されている。白川街道からは東通りが伸び、集落内を通過して再び白川街道に接続する。同様に白川街道の西側にも西通りが通る。西通りからは、庄川に架かるつり橋の「であい橋」に通じる道路が伸び、左岸のせせらぎ公園に通じる。

荻町地区の農用地は、住宅や民宿の周りに多く水田や畑として利用されている（写真3）。一筆あたりの面積は小さく、水田および畑は自給用の農作物栽培が主である。民宿を経営する世帯では、これらを宿泊者に提供する料理に利用していた。耕作放棄された圃場は少なく、管理された農用地が多い。

一般的な住宅は東通りや西通り、そこから伸びる細い道の先に多く立地し、白川街道沿いには少ない。民宿も一般的な住宅と同じように、多くは東通りや西通りの沿線で営業し、白川街道沿いには1軒しかみられなかった。白川街道には多くの土産物店や飲食店が街道に向けて店舗を構えてい



第5図 白川村萩町地区における土地利用（2015年）

（現地調査により作成）

る。こうした店舗の多くは、通りに面した家屋の一部で営業し、その奥の部屋や二階を住宅として利用する。また、土産物店や飲食店は東通りにも立地する。見学施設は白川街道と東通り沿いに位

置し、白川街道南部の白川八幡宮の一角には「どぶろく祭りの館」、北部には合掌造り家屋の「和田家」がある。東通り沿線には、「明善寺郷土館」や合掌造り家屋の「長瀬家」や「神田家」が立地



写真3 水田越しに眺める合掌造り家屋
(2015年9月羽田撮影)

する。こうした土産物店や飲食店、見学施設の立地から荻町地区における主な観光ルートは白川街道と東通り沿線にある。

合掌造り家屋は、白川街道沿いでは北部に5棟と中央部に2棟が立地するが、その多くは東通りや西通り、そこから伸びる細い道の先に位置し、分散している。利用形態としては一般的な住宅や民宿、土産物店、飲食店、見学施設、倉庫などである。一般的な住宅の多くが立て替えられ、合掌造り家屋数は10戸と全戸数に対して少なかった。民宿は荻町地区で営業する全軒が合掌造り家屋である。土産物店や飲食店では合掌造り家屋と非合掌造り家屋の割合は同程度である。見学施設として内部の一部見学が可能となっている合掌造り家屋は、他の合掌造り家屋に比べ規模が大きいことが特徴である。

その他に、駐車場が多くみられるのが荻町地区の特徴である。白川街道沿いに多くの駐車場があり、民宿もそれぞれ小規模な駐車場を有する。現在では集落内における観光目的の車両の乗り入れは制限されているため、これらの駐車は少ない。しかし、荻町地区の来訪者の交通手段として、自動車の利用が多いことが窺える。

Ⅲ 合掌造り家屋の内部環境

合掌造り家屋は、一般的な住宅や民宿、土産物

店、飲食店、見学施設、倉庫などとして利用される。その中で、住民の生活様式と最も強く結びついた合掌造り家屋の利用形態は一般的な住宅であろう。一方、荻町地区が保全しようとする集落景観から想起される農村像にあった家屋内部の環境を残すのが、宿泊者に寝食の場を提供しながら、「農村らしさ」を感じさせる民宿だと予想される。したがって、以下ではこの2つの利用形態をとる合掌造り家屋の特徴を検討する。

Ⅲ-1 一般的な住宅の合掌造り家屋

調査を実施した2015年9月の時点で、合掌造り家屋を非営利目的、つまり、一般的な住宅として利用する世帯は10世帯である。そのうち、調査協力を得られたのが7世帯であり、半数以上の世帯を対象にすることから、ある程度の代表性を有すると考えられる。これら事例の家屋の用途や世帯構成、増築や改装の内容などをまとめたのが第6図である。

合掌造り家屋の用途のうち、主屋として利用する世帯が4世帯、別荘として利用する世帯が2世帯、空き家としている世帯が1世帯ある。合掌造り家屋を主屋として利用する4世帯では、全世帯で65歳未満の世帯員がみられ、なかには、3世代に渡って合掌造り家屋で生活する世帯もみられる(世帯1, 2)。世帯主の就業形態として、集落内の観光関連業に従事する者や(世帯1, 2)、白川村内で就業する者(世帯3)、職場が不特定なために居住地選択の自由度の高い建設業に従事する者(世帯4)がみられる。このように、職住が近接していたり、世帯主が居住地選択の自由度の高い業種に就業しているのが特徴である。3世代で合掌造り家屋を利用する世帯(世帯1, 2)では、1985年以前に増築が行われており、生活の変化のなかで手狭となったことが増築の要因となった(写真4)。養蚕の場として利用された合掌造り家屋の2階が居住空間として利用できないことが垂直的拡大を困難とし、水平的拡大、つまり増築を促したと考えられる。

合掌造り家屋を別荘として利用する2世帯(世

番号	家屋の用途	世帯構成（歳）						世帯主の就業先（業種）	増築・改装の内容（年）	備考
		-19	20-29	30-39	40-49	50-64	65-			
1	主屋	◆◆	▲	●		▲	●▲	集落内（観光業）	増築…1985年以前 内装，フローリング…1995年頃	
2	主屋	●●		▲		○○△	▲○	集落内（観光業）	増築…1975年以前 フローリング…2000・2012年	
3	主屋	●▲			●▲		○	白川村内	一部フローリング…2003年	
4	主屋					●▲		（建設業）	内装，フローリング…2014年	
5	別荘						○△	臨時雇用	洪水被害に伴う修理…1948年頃 フローリング，バリアフリー…2002年頃	臨時雇用で合掌家屋の屋根葺きを行う
6	別荘						△	—	一部バリアフリー，水回り…2005年頃	
7	空き家				△	○	○△	集落内（観光業）	内装（民宿利用のため）…1958年頃 軸組の修理，内装…1995年	合掌家屋で民宿経営（1958～1990年頃）

● 合掌家屋に住む男性 ▲ 合掌家屋に住む女性 ○ 合掌家屋以外に住む男性 △ 合掌家屋以外に住む女性

第6図 白川村荻町における非営利目的の合掌造り家屋を所有する世帯の特徴（2015年）

（聞き取り調査により作成）



写真4 増築された合掌造り家屋

（2015年9月田邊撮影）

帯5, 6)の世帯構成をみると、65歳以上の世帯員のみとなっている。両世帯とも子どもはいるが、合掌造り家屋を利用していない。今後も子世代は合掌造り家屋に住む予定はなく、合掌造り家屋を利用する現世代を最後に、家屋を取り壊す予定である。合掌造り家屋の利用は主に夏季から秋季にかけてであり、積雪のある冬季から春季にかけては岐阜県内の別宅で生活する。世帯主の就業先について、世帯5の世帯主は臨時雇用で合掌造り家屋の屋根の葺き替えを行っているが、世帯6は高齢な女性であることから就業していない。

合掌造り家屋を空き家としている1世帯（世帯7）は、70歳代後半の夫婦と、50歳代の息子、40

歳代の息子の配偶者が世帯員である。世帯員は集落内にある非合掌造り家屋の店舗兼住宅で生活しており、民芸品店を営んでいる。空き家となっている合掌造り家屋は、1950年代後半から1990年頃までは民宿として利用された。それ以降は空き家となっており、70歳代の夫婦が定期的に合掌造り家屋の管理を行っている。

以上のように、家屋の用途の違いから、世帯構成や世帯主の就業先に差異がみられた。一方、家屋の用途に関係なく共通する点もみられる。それは家屋の改装についてである。事例として挙げた全世帯において1990年代後半以降に内装の修繕や床のフローリング化・バリアフリー化といった改装が施されている（写真5）。なかでも、床のフローリング化は7世帯のうちの5世帯で行われており、世帯2では床全面がフローリングである（第7図）。それ以外の世帯では、居間や台所を中心にフローリング化が進んでいる（第8図）。しかし、間取りの変更はされず、部屋数や部屋面積には大きな変化がない。

Ⅲ-2 民宿利用の合掌造り家屋

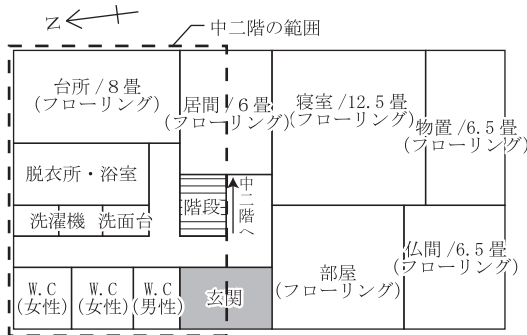
荻町地区には19軒の民宿があるが、すべてが合掌造り家屋である（写真6）。そのうち、15軒の民宿で調査協力が得られ、荻町地区における民宿の過半数であることから、これら民宿はある程度



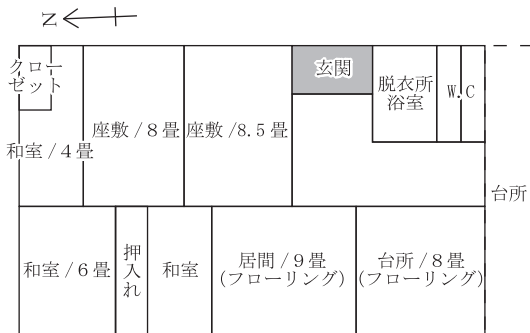
写真5 フローリング化された合掌造り家屋の床
(2015年9月田邊撮影)



写真6 民宿を営む合掌造り家屋
(2015年9月羽田撮影)



第7図 世帯番号2の合掌家屋の間取り (2015年)
(現地調査により作成)



第8図 住民3の合掌家屋の間取り (2015年)
(現地調査により作成)

の代表性を有すると考えられる。第9図は事例民宿の経営形態をまとめたものである。

民宿1軒当たりの従業員数は1～5人であり、平均従業員数にすると2.5人と小規模な経営である。15軒のうちの9軒が家族で経営しており、女性のみで営む民宿(民宿4, 12)もみられる。民宿の世帯主は50～60歳代に多く、男性の家族内従業員は役場や建設業などと兼業する場合もある。7軒で後継者が決まっており、未定が5軒、後継者なしが3軒ある。雇用労働力は6軒の民宿でみられ(民宿2, 5, 7, 8, 10, 15)、女性割合が高く、民宿1軒につき1人か2人が雇われている。創業年は、事例民宿の8割にあたる12軒が1970年代前半である。1970年代前半は、1971年に「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が結成されたり、1972年には「白川郷合掌村(現、民家園)」が営業を開始したりと、荻町地区の観光化が進んだ時期であった。部屋数は3～5部屋となっており、1軒当たり平均すると4.1部屋となる。合掌造り家屋の一部の部屋を客室とする民宿や、合掌造り家屋の全部屋を客室として利用し、家族は非合掌造り家屋の別棟で生活する民宿もみられる。収容人数は、最少で8人、最多で16人、1軒当たり平均すると11.5人となる。客室として利用される部屋は決して広くなく、6～8畳ほどの和室が大半である。

増築や改装の状況としては、保健所の指導によ

番号	従業員構成 (人)		創業年 (年)	部屋数 (部屋)	収容人数 (人)	増築・改装の内容 (年)	後継者	農地の 有無	備考
	家族内	雇用							
1	2	—	1945年頃	4	12		×	○	
2	男1女1	女1	1972	5	16	増築…1987年	×	○	2009年まで兼業
3	男2女2	—	1972	5	15	原型復元…1987年頃	○	○	
4	女2	—	1972	5	14	原型復元…1987年頃 床暖房, 水回り…不明	○	○	
5	1	1	1972	5	13	水回り…不明	○	○	檜風呂
6	男1女1	—	1972	4	13		×	○	
7	男1女1	女1	1972年頃	4	10	床暖房, 水回り…不明	○	○	檜風呂
8	女1	女1	1972	3	10	廊下…不明	未定	○	
9	3	—	1972	3	10	水回り…不明	未定	○	檜風呂
10	女1	女1	1973	4	12	—	○	○	
11	男1女1	—	1975	4	11	軸組の修理…2000年	未定	○	
12	女1	—	1975	4	10	水回り…不明	○	○	土木業に兼業
13	1	—	1975	4	8		未定	○	
14	男2女1	—	2000年頃	3	10		○	○	
15	3	2	不明	4	8	床暖房, 水回り…不明	未定	○	檜風呂

第9図 白川村荻町における民宿の経営形態 (2015年)

(聞き取り調査により作成)

り、全民宿で天井が設けられている。増築は民宿2のみにみられ、民宿2が増築に至ったのは、修学旅行生を受け入れるためであった。しかし、それ以外の民宿において増築はみられない。改装内容をみると、合掌造り家屋を建設当時の状況に復元した民宿(民宿3, 4)がみられる。その他、6軒の民宿で水回りの改装が実施されており、そのうち、4軒では檜風呂を採用している(民宿5, 7, 9, 15)。白川村の寒い冬を快適に過ごせるよう、床暖房を完備する民宿も3軒みられ(民宿4, 7, 15)、宿泊客の満足度が向上するような改装が施されている。

農地の有無をみると、すべての民宿が農地を保有し、そこで栽培・収穫された農作物を宿泊客の食事に利用する。そうした食事を提供する際には、時折、自家栽培の食材を利用していることを宿泊客に伝えている。こうした取り組みにより宿泊客が要求する「農村らしさ」や「食の安全性」といった面での満足度を高めている。

IV 白川郷における農村像と生活様式の相違

IV-1 合掌造り家屋に対する住民のまなざし

合掌造り家屋で生活する住民にとって、合掌造り家屋はどのように認識されているのだろうか。それを検討するために、合掌造り家屋の利点と欠

点について、合掌造り家屋を一般的な住宅として利用する世帯の住民に聞き取り調査を実施した(第2表)。

合掌造り家屋は壁が少なく、部屋と部屋が繋がっていることから風通しが良い。この風通しの良さから、「夏が涼しい」ことを利点として回答する住民が3人いた(住民3, 6, 7)。また、過去のことはあるが、「養蚕をすることができた」ことを利点としてあげる住民(住民1)もおり、合掌造り家屋の居住空間としての利用価値ではなく、労働空間としての利用価値を評価する住民もいる。しかし、3人の住民(住民2, 4, 5)は合掌造り家屋の利点について「特になし」と回答している。一方、欠点に関しては、夏には好条件となっていた風通しの良さが、冬には悪条件となり、「冬が寒い」という意見がみられた(住民3, 4, 6, 7)。また、虫やへび、ネズミなどの「生き物の侵入が多い」ことを欠点として回答する住民もみられ(住民2, 7)、これは、合掌造り家屋が現代的な住宅に比べ、生き物が入り込むような隙間が多いために問題となっている。合掌造り家屋の特徴である大きな茅葺屋根からの茅の落下や、現代では必要性の低い囲炉裏の管理など、家屋の「手入れが大変である」といった回答も得られた(住民4, 5)。また、「2階に居住目的の部屋がつかれない」ことを欠点としてあげる住民もいた(住

第2表 萩町地区住民における合掌造り家屋の認識

番号	○…利点 ▼…欠点
1	○ (今はしていないが) 養蚕をすることができた。 ▼ 煙がこもるため、2階に部屋がつかれない。
2	○ 特になし。 ▼ ムカデなどの虫や、ヘビ、ネズミなどの生き物が2階などの隙間から入ってくる。
3	○ 夏が涼しい。 ▼ ガラス戸1枚のみなので、冬が寒い。
4	○ 特になし。 ▼ 冬が寒い。屋根の茅などが落下するなどして汚れやすい。
5	○ 特になし。 ▼ 屋根に雪が積もり、茅が凍るとまとまって抜け落ちてしまうなど、手入れが大変である。
6	○ 夏が涼しい。 ▼ 冬が寒い。
7	○ 夏が涼しい ▼ 冬が寒い。虫が多い。(囲炉裏も使わないと傷むので) 手入れが大変である。時代に合わない。

(聞き取り調査により作成)

民1)。住民7は、そもそも合掌造り家屋での生活は、現代という「時代に合わない」と回答する。

このように、合掌造り家屋で生活する住民の合掌造り家屋に対する認識をみると、「夏が涼しい」こと以外、現在の生活において利点となると感じていない。一方、欠点に関しては、「冬が寒い」、「生き物が侵入する」、「手入れが大変である」、「間取りの変更や改装が困難である」といった多様な回答が得られた。つまり、現代の生活様式の中では、合掌造り家屋は居住しづらい家屋であり、現代の非合掌造り家屋と比較すると不便な点が多く、「時代に合わない」建物となっている。

Ⅳ-2 農村像と生活様式の相違

萩町地区における合掌造り家屋は、集落の中心を縦断する白川街道沿いよりも、東通りや西通り、さらに、その奥の通りに多く立地し点在していた。合掌造りの周囲には農地があり、コメや自家消費用の野菜が栽培される。農地を挟んで眺める合掌造り家屋は伝統的景観として評価され(西山ほか、1995b)、来訪者に「郷愁」や「長閑さ」といった感情を抱かせる。さらに、合掌造り家屋の民宿には、囲炉裏のある居間や畳敷きの寝室があり、食事には地元で採れた食材を使用した料理が提供される。こうした、民宿での体験により宿泊者は一層の「農村らしさ」を感じる。とはいえ、こうし

た民宿でも、内部環境は変化している。民宿によっては、家屋完成当時の状況に改装が施されている。また、床暖房の導入や、水回りの改装のなかで檜風呂を採用するなど、来訪者の要求する農村像を壊さない程度に改装が図られている。

一方、一般的な住宅として利用される合掌造り家屋では、その外観から連想されるような一まるで民宿で目の当たりにできるような一内部環境とは異なっている。間取りに関しては大きな変更はないものの、床のフローリング化が進行し、ソファといった西洋的な家具もある(写真7)。合掌造り家屋で生活する住民の多くは、合掌造り家屋に利点をあまり認めておらず、欠点を多く認

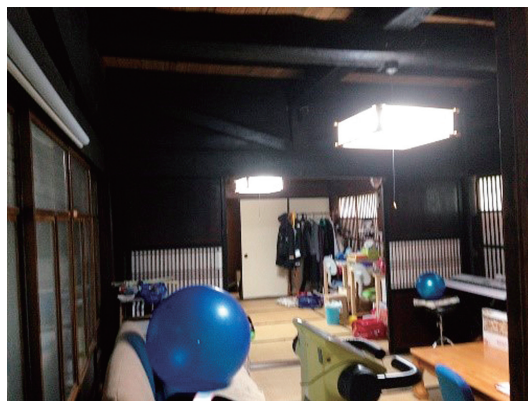


写真7 ソファの置かれた合掌造り家屋

(2015年9月田邊撮影)

識している。このように、合掌造り家屋の住民の生活様式は時代の流れのなかで確実に変化しており、改装の内容や合掌造りに対する評価からみても、住民が求める生活様式は都市部で生活する人々と大差はなかった。

V 結論

本稿は、岐阜県白川村荻町地区を事例に、合掌造り家屋の内部環境に着目し、そこで生活する住民の家屋内部に対する変更行為や、家屋に対する認識を通して、対象集落が保全しようとする農村像と合掌造り家屋で生活する住民の生活様式との相違を明らかにした。

荻町地区の集落景観を代表する構成要素として合掌造り家屋がある。1700年前後から1955年頃にかけて建設された合掌造り家屋は、白川郷の自然条件や人々の営みの中で成立してきた。しかし、第二次世界大戦後に進行した過疎化と、電源開発用のダム建設により、合掌造り家屋の棟数は減少した。1970年代になると、合掌造り家屋を有する集落景観の崩壊が危惧され、住民による景観保全活動が開始された。それと同時に、集落景観を地域資源とした観光化が進展することとなる。結果として、住民による保全活動は、1976年に伝建地区、1995年に富山県の五箇山とともに世界文化遺

産に選定されるといった成果をもたらした。

荻町地区に現存する合掌造り家屋は、白川街道沿いに集中するのではなく、集落内に点在し、農地に囲まれている。家屋の利用形態は、一般的な住宅や民宿、土産物店、飲食店、見学施設、倉庫などがあった。その中で、一般的な住宅と民宿として利用される合掌造り家屋内部の環境に着目すると、一般的な住宅では床のフローリング化が進んでいる。合掌造り家屋で生活する住民の居住環境としての評価をみると、現代の生活において合掌造り家屋には利点が少なく、合掌造り家屋での生活は、居住する上で非合掌造り家屋よりも耐寒性に乏しく、管理が煩雑であり、生き物が侵入するという問題をもたらしている。一方、民宿では、居間には囲炉裏があり、客室は和室である。また、民宿によっては合掌造り家屋の建設当時の状況に改装しており、古い「農村像」を提供できるような家屋の内部環境にしていた。

以上のように、荻町地区を来訪する観光客が目にする集落景観や民宿や見学施設で体験する内容と、合掌造り家屋で生活する住民の現代の生活様式には相違がある。合掌造り家屋で生活する住民が要求する生活は都市部で生活する人々と大差はない。しかし、合掌造り家屋という保全に関する規制の多い家屋で生活していることで、満足できる居住環境への変更が困難となっていた。

本稿に用いたデータは、筑波大学地球学類人文地理・地誌学分野の田邊希望氏、長崎宏輝氏、安永藍氏の各グループが2015年9月25日から9月27日にかけて実施した調査に基づいている。なお、平成27年度科学研究費補助金基盤研究(A)「世界遺産の創造と場所の商品化に関わる理論的・実証的研究」(研究代表者:松井圭介、課題番号60302353)による研究費の一部を使用しました。末筆ながら以上を記して感謝申し上げます。

[注]

- 1) 結が相互扶助であるのに対し、コウリヤクとは自発的に労働力を提供することであり、恩返しとしての労働力の提供を条件としない労働奉仕である。

[文献]

伊藤 薫 (2014) : 飛騨地域の観光地間と観光地内の競争と協力－中小企業を中心とする実証的分析－。
Review of Economics and Information Studies, 15, 49-72.

- 神田孝治 (2012) : 白川郷へのアニメ聖地巡礼と現地の反応－場所イメージおよび観光客をめぐる文化政治－. 観光学, **7**, 23-28.
- 黒田乃生・小野良平 (2003) : 白川村研究の系譜にみる文化財としての集落景観保全における問題点. ランドスケープ研究, **66**, 665-668.
- 黒田乃生・下村彰男・小野良平・熊谷洋一 (2001) : 白川村荻町伝統的建造物群保存地区における集落景観の特徴とその保全に関する研究. ランドスケープ研究, **64**, 759-764.
- 才津祐美子 (2006) : 世界遺産の保全と住民生活－「白川郷」を事例として－. 環境社会学研究, **12**, 23-40.
- 佐藤悦夫 (2015) : 外国人の見た五箇山と白川郷－観光地としての魅力の検討－. 富山国際大学現代社会学部紀要, **7**, 53-62.
- 白川村史編纂委員会 (1998) : 『新編白川村史 中巻』. 白川村.
- 高口 愛・西山徳明 (2006) : 白川村荻町の伝統的景観管理とその変遷－歴史的集落における景観管理能力の発展条件に関する研究 その1－. 日本建築学会計画系論文集, **605**, 127-133.
- 谷口知司・古池嘉和・瀬戸敦子 (2007) : 観光地「白川村」の発展過程と観光の果たす役割. 岐阜女子大学紀要, **36**, 37-41.
- 西山徳明 (2001) : ヘリテージ・ツーリズムと歴史的環境の保全－世界遺産白川村合掌集落における自律的慣行の実現と課題－. 国立民俗博物館調査報告, **21**, 61-80.
- 西山徳明・三村浩史 (1995a) : 伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究－白川村荻町合掌集落を事例として－. 日本建築学会計画系論文集, **474**, 133-141.
- 西山徳明・三村浩史 (1995b) : 伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の変容と維持－白川村荻町合掌集落を事例として－. 日本建築学会計画系論文集, **474**, 151-160.
- 羽生冬佳・黒田乃生・高橋正義 (2002) : 白川荻町地区における観光行動と観光対象としての集落景観に関する研究. ランドスケープ研究, **65**, 785-788.
- 水ノ江秀子・西山徳明 (2007) : 明治中期の土地利用にみる合掌造り集落の空間構成と伝統的景観－白川村荻町伝統的建造物群保存地区を事例に－. 日本建築学会計画系論文集, **622**, 91-96.

英文タイトル

Differences between the Rural Image and the Life-style of Residents in Shirakawago

HATA Tsukasa, MATSUI Keisuke and ICHIKAWA Yasuo